

視覚障がい者の映像アクセスをサポートする音声ガイドの現在と未来 Current and Future of Audio Description to Support Accessing Moving Pictures for Visually Impaired Persons

小高 公聡 川手 美由紀

Tomoaki KODAKA Miyuki KAWATE

特定非営利活動法人シネマ・アクセス・パートナーズ

Cinema Access Partners

E-mail: mail@npo-cap.jp

1. 視覚障がいと映画鑑賞

厚生労働省のデータでは、日本における視覚障がい者の数は31万人と言われております。しかし潜在的な人数はそれをはるかに超えており、その90%以上が中途視覚障がい者です。急激な高齢化が進む中、白内障は2000万人、老眼は5000万人というデータもあり、視覚に何らかの障がいがある人が増え続けています。

2005年に視覚障がい者463人に対して行われたアンケート調査(有効回答数459)によると、「音声による解説のついた映画を見たいと思いますか」という問いに対して、「とても見たいと思う」64.3%「やや見たいと思う」25.9%、合計90%を超える人が「映画を見たい」と答えています。(出典:文化庁平成17年度芸術団体人材育成支援事業「視覚障害者の映画鑑賞要望に関する調査研究」)

2009年劇場公開映画約600本中、音声ガイド付きは6本。同年発売のDVD約5,000タイトル中、音声ガイド付きは14タイトルでした。(当法人調べ)現状では、映画の制作委員会や映画会社が自ら音声ガイドを提供する作品はきわめて少数といえます。ほかに各地のボランティアグループ等が鑑賞会や上映会を開いたり、一部の映画館がボランティアと協力して独自に音声ガイドを制作しバリアフリー上映を行うという例は、この10年で確実に増え、視覚障がい者及び関係者の認知度は確実にあがっています。

当法人は、音声ガイド制作を事業化し、映画製作者と共に、映画やDVDなどのUD(ユニバーサルデザイン)化に努め、誰もが必要な情報を、当たり前を選択することができる社会の実現を目指しています。身近な映画館で、観たい時に観たい人と映画鑑賞するということが、視覚障がい者のQOL向上や社会参加に繋がると考えます。

2. 映像メディアの音声ガイドとは

音声ガイドとはどんなものかと問われた場合、「映像が伝える視覚情報を、「言葉」に置き換え、セリフや状況音・効果音など映像についている音声の合い間に、ナレーションとして付加するものです」と答えることができますが、実際に制作に関わると単純な作業でないことがわかります。

文字情報は、読み上げることで伝えることができますが、例えば本の中に写真・イラスト・表・グラフといったものが入ってくると言葉にして伝えるのは難しくなります。WEBサイトでも同様に、読み上げソフトが対応しない、あるいは音声化できない部分が出てきます。映画やテレビの場合、さらに時間的な制限が加わるため、難易度があがります。

映画は映像作品であり、作者の製作意図やテーマというものがあります。音声ガイドがそこから外れた表現をした場合、誤った情報をユーザーに伝えることになってしまう可能性があります。また映画解説者のような音声ガイドでは、ユーザー自身が映画を鑑賞したと実感できるでしょうか。視覚障がい者の映画鑑賞をサポートするツールとしての役割を果たすためには、映画の製作意図に沿いながら、同時に音声ガイドユーザーが求める情報を音声ガイドにすることが大切です。そのためには、映画製作者と音声ガイドユーザー双方の協力が必要になってきます。

3. 音声ガイドの制作

音声ガイドは、最終的にナレーションとして音声化されますが、まずは収録用に原稿を作ります。原稿の書き手のことをディスクライバーと呼んでいます。作品ごとに、ディスクライバー1名、監修1名、視覚障がい者モニター複数名の制作チームを作り、映画製作

サイドにも監修していただける方を決めてもらいます。映画製作サイドからの監修としては、これまで監督・助監督・脚本家・プロデューサーなどが担当してきました。ディスクライバーは、原稿を書き上げるまでに、モニターに対して、あるいは映画製作サイドの監修に対して、質問や参考意見を求めたり、資料を受け取るといったことが可能です。

原稿制作の過程にはモニター検討会が含まれ、映画製作サイドから監修以外の関係者が参加することもあります。映画関係者と音声ガイドユーザーである視覚障がい者が、同じテーブルに着いて検討するということは、音声ガイドの質を高めるだけでなく、相互理解を深めるうえで貴重な機会になります。モニターが「それは音で判る」と発言することがあります。「〇〇がドアを開け出ていく。」のように、私たちは、つい登場人物の行動をガイドするものと思いがちですが、視覚障がい者が必要としているのは、本編の音から判断できない部分の情報なのです。そのシーンに出ているのが〇〇のみで、足音とドアの開閉音が明確であれば、ガイドは不要な場合が多いです。

収録用の原稿は、必ず映画製作サイドの監修の確認を経て完成します。また音声ガイドのナレーター選定も、どのような声がふさわしいか、可能な限りモニターと映画製作サイドの意見を取り入れて行います。

収録現場にも、モニター会同様映画関係者が立ち合うこともあります。

4. ディスクライバーの役割

音声ガイド原稿の書き手であるディスクライバーには、次の4つのことを心掛けてもらっています。

4.1 正確な情報提供

正確な情報を提供するには、映像からの情報を正確に受け取る力が必要です。映画の製作サイドから台本データも提供していただけますが、それは映像化のための台本であって、完成した映像が文字になったものではありません。コップがマグカップだったという程度は珍しいことではありません。衣装や髪形、化粧などは登場人物のキャラクターを表現する代表的な視覚情報ですが、台本には具体的に書かれていないことも多く、質問して確認することがあります。

作品の舞台や時代背景について調べ、映画の中の小道具一つにも意味があることを知れば、音声ガイドとしての情報選択の幅が広がります。

また、同音異義語など、誤解を招くような言葉にも注意が必要になります。

4.2 「読み上げられるもの」であり、「聞かれるもの」

「読み上げられるもの」であり、「聞かれるもの」であると意識することは、音声ガイドの完成形が、原

稿ではなく音声化したものだという事実と、音声ガイドユーザーの立場で考えるということをお忘れのためです。

音声ガイドユーザーは、本編の音と同時に音声ガイドのナレーションを聞くことで、場面を想像したりストーリーを理解しながら楽しんでいきます。聴覚情報に偏ることに加えて、音声ガイドを本編のものととのセリフや効果音などの合い間に入れることにより「間」がなくなると、集中力も続かなくなってきます。言葉を咀嚼し想像につなぐための「間」や、映画のリズムの中であえて聞くべき「間」というものが存在します。従って、映画のリズムやスピード感に合わせ、簡潔で聞き取りやすい表現が基本ということになります。さらに、個人の経験値、年齢、性別、などによって、想像するものに差が生じることは否めません。その差を少しでも小さく、だれもが元の映像に近い(映像の意図に近い)想像ができるよう推敲を重ねます。

4.3 鑑賞者がそれぞれの感想を持つことができるように

次の二つの表現を比較してみます。

「彼女は悲しみを堪え、決意した。」

「彼女はあふれる涙を拭い、真直ぐ前を見据えた。」

前者は、よく台本のト書きにあるような表現です。後者は、役者の演技そのままといった表現です。どちらが正解ということはありませんが、私たちは可能な限り後者のような客観表現を採用しています。晴眼者が映画鑑賞しているとき、役者の表情や仕草を見た結果として「悲しみを堪えている」「何かを決意した」と感じ取ります。音声ガイドユーザーも、結果でなく原因・理由を音声ガイドで聞くことによって、想像の中で感じ取ることができます。感じ取ったものの約2時間の積み重ねが、映画鑑賞という体験ではないでしょうか。

視覚情報を「言葉」に置き換えるという作業は、実はこうしたことを意味しています。

4.4 視覚障がい者と晴眼者が同じタイミングで感情移動できるように

映像と音声ガイドを完全に一致させることは出来ないまでも、感情移動のタイミング近づける努力をします。劇場内が一斉に笑ったり、どよめいたり、息を飲む瞬間などがありますが、映画を大勢で共有することも映画鑑賞の楽しみの一つです。

この“瞬間”を音声ガイド化するには、テクニックが必要になります。“瞬間”を言葉にした時点で長くなり“瞬間”ではなくなってしまうからです。必然的に、コメディやホラー・サスペンス映画、激しい動きを伴う映画などは課題が多いことになります。

音声ガイドの聞き方で、会場内の全員で聞くという

場合があります。その際、タイミングが大きくズレていると、晴眼者に対して違和感を与えてしまうこととなります。

ディスクライバーは具体的には、次のことを考えて原稿を書き上げています。

- (1) どの情報を音声ガイド化するか
- (2) どのような言葉で文章化するか
- (3) どこに音声ガイドを挿入するか
- (4) ナレーターへの指示

収録の際は必ず立ち合い、場合によってはディレクターを務めます。ナレーターに対しても、映画との距離感を計りながら読み方を指示していきます。音声ガイドのナレーションがどうあるべきか、試行錯誤しているところですが、映画やTV番組そのものに付いているナレーションとは明らかに違います。音声ガイドの立場がそうであるように、本編に対して客観性を大事にします。が、同時にスムーズな感情移動を助けるために、映画の流れに即して緩急をつけたり、緊迫感や明るさなど感情の色付けも必要になります。声の変化によって場面転換を伝えるというような方法を取ることもあります。

5. モニターの役割

視覚障がい者モニターには、映画の素材をあらかじめ音声ガイドなしで聞いてもらいます。本編の音のみで十分想像できたところ、逆に何の音か疑問だったところ、ストーリー展開などを把握してもらいます。

モニター検討会では、ディスクライバーが映像に合わせて5分から20分程度ずつ原稿を読み上げ、その範囲についてお互いに質疑応答を行っていきます。音声ガイドが付いたことで、疑問や誤解が解けたところや、逆に音声ガイドをカットしてもよいところなどを確認します。そして、ディスクライバーは、表現方法などについて懸案の箇所について質問し、解決の方向性を探ります。

6. 音声ガイドの聞き方

映画の音声ガイドを聞く方法は大きく分けて二通りあります。

一つは、聞きたい人だけが聞く方法。映画本編とは別系統で音声ガイドデータを再生・送信します。その際、本編フィルムとズレが生じないようにオペレーターが再生速度を調整し同期させる必要があります。聞きたい人それぞれが、携帯ラジオなどの受信端末を持ちイヤホンを使用します。FM電波や赤外線が使われています。

もう一つの方法は、会場全体で聞く方法。音声ガイ

ドを焼き付けたフィルムを上映します。イヤホンの使用に負担を感じるユーザーも、この方法はストレスなく聞くことができますが、作品によっては向かない場合もあります。展開が比較的ゆったりして音声ガイドが余裕をもって収まっている、音量的にも全体を通してあまり差がない作品のほうが向いています。

一点。本編がデジタルデータの場合でも、経験上僅かなズレが生じます。これは機材のせいかもしれません。

7. 音声ガイドの制作以外に

視覚障がい者が映画情報を得ることも容易ではありません。映画の公式サイトも、開くと同時に予告編映像等が流れたり、視覚的な効果を施されたものが多く、アクセスしにくいのが現状です。このバリアを解消し、読み上げソフトが使用しやすいようなページを提案しています。

DVDやブルーレイを再生するための各種メニューにも音声ガイドが必要です。原稿チェックや動作確認のお手伝いをしています。

8. 音声ガイドの未来

映画も急速にデジタル化がすすみつつあり、字幕とともに音声ガイドも本編にデータとして付属させることが容易になります。その場合、音声ガイドの聞き方として、聞きたい人だけが聞くという方法を可能にするには、何らかの技術と劇場側の設備が必要になるでしょう。

映画・テレビのデジタル化とともに、音声ガイドの普及率が上がるとすれば、ディスクライバーの養成が急務と思われます。また、ニュースや生活情報、広告、CMなど、多岐にわたる映像素材に音声ガイドを付けるには、当法人が映画作品のために行っている手作りの制作方法のほかに、もっと簡便な方法が開発されるべきでしょう。

映像メディアが携帯電話やゲーム機やタブレット型PCなどに広がり、持ち歩けるようになることは、視覚障がい者にとっても行動範囲を広げることに繋がります。音声によるサポートシステムが望まれるところであり、それらは決して障がい者専用ではなく子供からお年寄りまでが使えるユニバーサルデザインとして開発されるべきだと考えます。

最後に、今年度より「画像電子学会」のなかに、「視覚・聴覚支援システム」研究会が発足したとのこと。研究者の皆様のご活躍と今後の研究成果に大きな期待を寄せています。